美術の窓(75)

平成12年の展観活動を振り返って
——年次評価と来年度への展望

大和文華館館長　水田　徹

名品選3『大和文華館の陶磁』
平成12年8月3日刊

名品選4『大和文華館の中国・韓国絵画』平成12年11月17日刊

文華苑の木々も色づき、蛙股池も水量を減じ、蛙が心なしか身を縮めたようにみえます。開館40周年の記念の年もお陰さまで恙なく終わろうとしております。これを機に当館のこの一年の運営、とりわけ展観活動をいささか振り返り、館活動の年次評価の一端とさせていただきたいと存じます。

まず記念すべき年の展観として、秋の特別展に加え、館所蔵品によるジャンル別の名品展を4回連続して催しました。すなわち名品展Ⅰとして日本絵画、Ⅱとして陶磁以外の工芸品と彫刻、Ⅲ陶磁、Ⅳ中国・韓国絵画であります。そしていささか面映ゆい感がいたしましたし、なによりも不遜の誘りを免れないとも考えましたが、思い切って各展覧のタイトルの頭に「大和文華館の」という枕をつけさせていただきました。大和文華館の名は夙に知れ亘り、蔵品の質の高さと研究機関としての活動は一定の評価も得ているところです。しかしながら近郊の住民数ひとつみても、開館当時に比べ奈良市は約3倍、生駒市はなんと約5倍増となっており、例えばお若い世代、あるいはこの間に新たに市民となられた方々にとって、大和文華館は存外なじみの薄いものになっているのではないか。そうした方々に改めて大和文華館の存在を周知いただき、大和文華館の名に親しんでいただく必要があるのではないか、と考えた次第です。「近くにこんないい美術館があったのですね」と声をかけて下さる例もあったと聞くにつけ、このタイトル名は一定の成果を収めたものと、手前味噌ながら自己評価しております。

話は前後しますが、ジャンル別に4回も名品展を重ねたのは、40年を機に館の所蔵品の総体をご覧いただきたいと願ったからでした。と同時に、ご覧いただいた皆様の反響、反応をつぶさにお教えいただき、41年目からの我々の努力目標の参考にさせていただきたいと考えたからでした。例えば記念名品展Ⅰは修理を終えた「松浦屏風」を久しぶりに公開できたこともあって好評を博しましたが、「松浦を見て、久しぶりに孫の顔を見たような気分ですわ」というあるご年輩のご感想は、我々に常設展示という、古くて新しい課題を改めて思い起こさせるものでした。文化財保護の観点からいって、絵画作品を常時展示するのは無理としても、人気をいただいている作品、皆様に心の故郷にしていただいているような作品は、例えば年に一度は必ず、それも出来ればある決まった時期に定例的に展示するといったシステムの導入が必要でしょう。さっそく検討を重ね、恒例の秋の特別展に加えて、春にも館蔵品による名品展をラインアップすることとし、来年度は4月早々、「絵画名品展—屏風絵を中心に」を開くことに致しました。

一方、館蔵品の総体をご覧いただく縁として4回の名品展それぞれに、簡便な手引書「名品選」を一冊ずつ刊行いたしました。すでに大和文華館には国別、ジャンル別の蔵品図録、オールカラーの名品図録などが整っておりますが、いずれもやや高価かつ大冊でありますので、簡便かつ比較的安価な小冊子を40周年記念事業として発刊した次第です。ただし所蔵品の総体をご覧いただくという展覧会の趣旨に則して、小論とはいえ各巻に、大和文華館所蔵品の特色、各作品の美術史的位置づけという切り口の概説を加えてございます。とりわけ「名品選3」と「名品選4」は新進気鋭の学芸員が最新の学説もふまえつつ、しかし館蔵品の性格にふさわしい章立てと記述に心掛けてくれました。展示室でメモ代わりに、あるいは机上の真珠の小箱として、ご愛用いただければ幸甚です。

秋の特別展「渡辺始興」はお陰さまで大好評で、会期後半の数週間は連日500人を越す入館者をお迎えし、最後は入場券も底をつくという、笑い話のような事態が生じました。特に受付の人手不足から、切符切りやカタログ販売でお待たせすることも多く、皆様にもご迷惑をおかけいたしました。

さてこの盛会の理由はどこにあったのでしょうか。担当者の積年の準備と企画力、そして所蔵家各位の全面的なご協力は言うまでもありません。「NHK日曜美術館」が45分に亘って取り上げてくれたのも与って力があったでしょう。一般にはほとんど無名の画家の、しかも展示品の半分近くがこれまで紹介されることのなかった新出の作品でしたので、研究者や専攻の学生さんが丹念にノートを取られる姿はある程度予想されました。しかしそれにもまして私共が感動したのは、専門家以外の皆様が実に熱心に作品をご覧になり、解説板をお読み下さる姿でした。「これもテレビに映っていた」という種類の私語は一切聞かれず、展示場は常にしんと静まり返っていたのです。そこまでお客様を引きつけたのは、ひとえに渡辺始興の力量でしょう。あの次々と展開する作風、にもかかわらず一貫した個人様式の存在、これこそが皆様の足を引き留めたのでしょう。芸術の底力を見せつけられた思いです。そして来年もそうした美術作品の力を少しでも多くの皆様方にご紹介し、感動を共有させていただくこと、これこそが我々に課せられた使命であると、館員一同、世紀の変わり目にあたり、改めて肝に銘じているところでございます。良い新年を迎えられますよう、そして変わらぬご愛顧とご鞭撻をお願い申しあげる次第です。

季刊 美のたより No.133
平成13年1月5日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.